

土に眠る (3)

【3】

三日間いっしょに連れだって歩いて、ミサキさんはパリへ帰った。

別れ際、なんとか暮らしてるようだ、東京にそう言うっておくよ、と言ったから、もしかすると父さんにようすを見てくれと頼まれたのかもしれない。ユミがお礼を言いかけると、

「あ、気にすることないの。あんたのために来たわけじゃないから。ブルゴーニュ、見たかったんだ。一人で歩くより連れがあつたほうがいいじゃない。それだけ」

あわてて手を振って言った。お礼を言われるのは苦手なようだった。

また単調な毎日になった。

フランスには勉強に来たので、べつに遊びに来たわけではない。だから退屈だなどと言ってはいけないとユミは思っている。でも、することがないというのは、ほんとうにどうしようもないものだった。

まあ、授業に出るだけはちゃんと出ている。

ユミが登録しているのは、デイジョン大学のなかでも「外国人学生のための文化講座」という別枠で、文化とはいっても主としてフランス語を勉強してるだけのようなものだったが、いろんな国の人がいるので、それを見ていただけでもけっこうおもしろい。

ある日、先生の話していることがあまりにわからないので（まったく、このわからなきときたらハンパじゃない、

土に眠る (3)

糞メラドー！)、教室のいちばん後ろにすわって、ぼんやりと前の席の人たちを眺めていた。見えるのは髪の毛ばかり。ほんとにいろんな色の髪がある。いちばん多い栗色にしたって、多種多様。色が薄いとまるで金髪みたいだし、濃いと日本人のちよつと赤茶けた髪と変わらない。そう、赤毛といえば、一人オランダ人がいるのだけれど、その人の髪の色はほんとにパーッと赤くて、はじめに見たときは感動してしまった。こどものとき『にんじん』という小説を読んだことがあって、そのなかで、主人公の赤毛の男の子をみんなが「にんじん、にんじん」て呼ぶのだけれど、意地悪でオーバーに言ってるんだらうと思ってた。でも、そのオランダ人の髪はほんとうにニンジンみたいに派手な色だ。聞いた話だと、北へ行くと、どんどんこういう赤い髪が多くなるんだって。ここデイジョンはパリよりもだいぶ南なので、街を歩いている人には濃いめの褐色が多い。つまり、日本人の髪に近い色。

日本を出るまでは日本人の髪は黒いとはばかり思ってた。「緑の黒髪」なんて言うじゃないの。でもこうしていろんな国の人の、いろんな髪毛の色と比べてみると、日本人の髪はけっして黒とはいえない。フランス人もユミの髪を褐色ブリュンヌだという。濃いめの褐色。そうなんだあ。そう言われて、よくよく鏡を見たら、自分の髪は褐色、英語のブルーネットだったのだ。それに気がついたとき、ユミはちよつとうれしかった。

ふしぎなものだ。日本ではよく考えもしないで黒髪なんて言ってる、そのなかのそれぞれの違いは気にしない。よく見ればちゃんど眼につくはずのちがいを無視して、みんなおんなじ黒髪だと思ってる。みんなおんなじ、その考え方ってすごく日本。ほんとうは黒い髪にもいろいろあるのに。アフリカ人の黒い髪だって、よく見ればそれぞれに微妙なちがいはある。セネガル人の髪なんか、黒いといってもただの黒じゃない、黒を通り越して青光りしている。黒

土に眠る (3)

さに注意をこらしてみれば、スペイン人の黒髪は日本人よりずっと黒い。あれがほんとの黒髪で、セネガル人ののはそれよりもっと黒くて、黒を通りこしているし、日本人のは黒になる手前といったところ。同じ黒い髪にしても、グラデーションでものがあがる。これは、フランスへ来てはじめて知った大発見だ。少なくとも一つだけは、フランスへ来て学んだことがあった。これはいいことだ、うん。

教室の最後列の、誰からも見られない席で、ユミはさまざまな髪の色を見比べながら、ふしぎに気持ちがあきまいた。西洋の小説を読むと、たいていは人物の描写の手始めに、まず髪の色と眼の色が出てくる。人間をイメージするときに髪の色を手がかりにするのもとうぜんかも。こんなに個人的なんだから。日本では「メガネかけてる？」なんて聞いたりするけど、「金髪？ 褐色？」と聞いておけば、しつかり限度度がせまくなるし、ずっと便利だ。

街のスーパールの化粧品売場にはシャンプーやリンスや、

アイライン、マスカラと、いろんな種類が並んでいる。それは日本とおなじだけれども、おもしろいのはそれぞれに「青い眼向き」とか「褐色用」とか書いてあること。「金髪はますます金髪に」「白い髪はますます白く」なんていうキヤッチフレーズもある。ユミは青いアイシャドウがほしくてしようがなかったのだけど、「青い眼に」と書いてあるので、長いあいだ遠慮して買えなかった。でもやっぱり青いシャドウがほしかったので、ひとつ取ってレジに持っていったら、別になんにも言われなかった。部屋に帰って、その青い眼用の青いシャドウをうっすらとつけてみたら、そのときだけ青い眼になったみたいなきがした。たぶんキャッチフレーズのせいね。

眼の色も髪の色も、こんなにいろいろあれば自分の好みというものもあるだろう。恋人にするならこの色と、小さい時から心に決めていたりするのかもしれない。ママが淡い栗色だから、恋人もそんな人となんと思ってい

土に眠る (3)

のに、ある日ふと気がついてみたら、濃い褐色の髪の女性が好きになっていたりして、自分で驚いたりもするのだろうか。それとも、理想の金髪と違ってアプローチしてみれば、ぜんぜん自分と気の合わない性格で、これまた意外だったりして……。ま、そういうことなら、みんなおんなじ髪の毛の日本人同士だってじゅうぶんありうることではある。むしろ、そんなことばかりだと言ってもいい。

ユミだったら、どの色の髪がいちばん好きだろうか。そう思って、前に居並んでいる学生たちの髪を、教室の後ろからぐるっと見まわしてみる。いろんな髪が集まりとして眺めると、ただの教室もなかなかの盛観だ。外国人留学生の多いフランスならでは、と言っている。色だけではない。縮れぐあいもさまさま。ふんわりウェーブ。くるくる巻き毛。頭がおかしくなったみたいなの、ちりちりカール……。そのなかに、ふしぎな色合いのストレートな長い髪があった。灰色に少量の黄色がまじっているような、どう形容している

いのか、なんと呼んでいいのかかわからない色だった。何色ともつかなかったが、その色がナオミにはいちばんニュアンスに富んでいて、慕わしいような気持ちを抱かせた。あの色いいなあ。見てると心が安まるなあ。ナオミはそう思っていて、ずっとその柔らかいグレーの髪を見つづけていた。ところどころが、ふっとその人が横を向いたのを見たなら、中国人のウオンさんだった。中国人。つまり彼女の髪の毛は、日本人と同じ色だったのだ。もしはじめからその人がウオンさんだと知っていたら、ナオミはその髪を黒いと信じて疑わなかっただろう。黒髪と決めてかからなかったから、髪それ自体がもっている微妙なニュアンスをすっかり味わうことができたのだ。そしてナオミは、自分もあの何ともいいよりのない微妙な色合いの髪の毛をしているのだと思っていて、すごく満足した。

それにしても、やっぱり金髪は美人なのだろうか。日本人にとって、金髪碧眼は西洋人の代名詞みたいになって

土に眠る (3)

いるけれど、かならずしも金髪ではない淡色の髪もあるよ
うだ。『にんじん』を読んだかぎりでは、赤毛はあまりすて
きだとは思われていないような印象だ。そうそう、それに
『赤毛のアン』。あれはたしか、孤児院から出てきたばかり
の小さな少女の頃にはまぎれもない赤毛で、おとなになっ
たら「ほとんど金髪」になるんじゃないやなかつたつけ。髪の毛
の色も年齢によって変わっていくのかもしれない。そうい
えば、小さいこどもには薄い色の髪が多いようない。

男と女ではどうだろう。金髪はぜったい女の人に多い。
それはたしかだけれど、女の人のなかには染めている人も
多いから、生まれつきの比率はどうかかわからない。た
えばマダム・ペコーはともきれいな金髪だ。奥さん、
金髪できれいですね、ってムツシユウ・ペコーにお世辞を
言ったら、「染めてるんだよ」と言われてびっくりしたこと
がある。だって眉毛も金髪なのに。ほんとにびっくりした
ので、口に出してそう言ったんだったかな、そのときペコ

ーさんは「睫毛を見ればわかるよ。うちの奥さん、睫毛は
褐色でしょ」と言った。なんであんなこと、私に言ったん
だろ。ちようど奥さんが席をはずしたときのことだったけ
ど、そのすぐあとで奥さんが現れたとき、ユミはなんだか
気の毒なような気がした。

ムツシユウ・ペコーは、「外国人学生受入れ」の部屋の奥
の机に座っているおじさんで、ある日、家でパーティーをす
るからいらっしやいと誘われた。他にも、マレーシア人の
女の子とか、タイの男子とかいて、午後のお茶をご馳走に
なった。

その数日後、イヌ君にその話をしたら、ムツシユウ・ペ
コーって、アジアの女子留学生によくない興味を持って
って噂だよ、あんまり親しくしないほうがいいんじゃない
の、と言われた。よくない興味って、どういうことかわか
らなかつたけど、そういうえば、マレーシアの女の子の背中
に腕をまわして、とても親しげに話していたのを思い出し

土に眠る(3)

て、つぎに誘われた時には行かなかつた。

秋が深まっていた。デイジョンという田舎の、そのま
たはずれの女子寮の部屋で、まるで島流しにされたような
気分の日々を送っている。初めての土地の初めての秋は、
その先どうなるかわからないので、ただ深まるいっぽう。
ひとりぼっちの息苦しさが強くなっていくだけだ。

昼がどんどん短くなって、そして当たり前前だけど、その
ぶん夜が長くなる。その短い日中でさえ、電灯をつけなけ
れば本も読めない日が多くなった。

ある水曜日、朝から窓の外が煙っていた。霧だ。それは
ユミがはじめて見るような濃い霧だった。中庭を隔てただ
けの向こうの家が、墨絵のようにぼんやりとかすんでいる。
見慣れないその景色を、ユミははじめのうちおもしろがっ
ていたのだが、午後になっても霧は晴れるどころかどんど
ん濃くなっていつて、とうとう向かいの家も見えなくなっ

た。

ユミはなんだか心細くなって、四階のミヤちゃんのとこ
ろへ行ってみた。でも、ドアをノックしても返事がない。
こんな日に、いったいどこへ行ったんだろう。しようがな
くてユミは引き返し、また階段の踊り場に出た。

この寮の階段室は、建物から少し張り出して、カギ
括弧の形で外に面している壁が、全階をつうじて総ガラス
張りになっていいる。踊り場のまんなかに立つと、明るい日
なら、まるで張出した能舞台の前面に立って前から横か
らも見られているような感じで、ユミのお気に入り場所
だった。

だけどこの日は、まわりじゅう霧だらけ。ガラスに額を
押し当てて見下ろすと、地面は白くて半透明な流れの底に
沈んで見えない。眼の下には、霧だけがまるでカルピスソ
ーダの川のように流れていた。霧にも濃淡があつて、川の
流れと同じように、急流になっているところがあるかと思

土に眠る (3)

えば、一か所で淀んでいたりして、白一色の壮麗な流線模様を描いている。そのなかから、杉の樹々が亡霊のように上半身を浮かび上がらせていた。

まるで寮の建物全体が、白い海に浮かんだ島のような。ガラスに額を押し当てたまま外を眺めていると、支えもなく霧のなかに漂っているような気分になってきて、ナオミの体はほんとうに揺れはじめたのだった。

あとで聞いたところでは、ミヤちゃんはその日、町へ買物にでかけて、帰りにヒッチハイクで寮まで乗せてもらったのだそう。日中でもほの暗い郊外を車で走っていたら、並木が一本また一本と、直前になって立ち現れてはすぐにすうっと消えて見えなくなる。

「ぼーっと白くかすんだ大きな影が、すぐ間近かまで迫って過ぎるの。なんかお化けみたいなの。ふだんよりめっちゃ大きく見えてさあ。怖かったよう」

ミヤちゃんはガラにもなく肩をすくめた。

そんな濃霧の日が幾日かつづいた後で、今度はふいに晴天になった。

朝、ブラインドを上げると、外は陽光がはしゃぎまわって眼に痛いくらい。広い空がどこまでも真っ青で、木や屋根が真っ白。昨日までの霧の、薄めた牛乳みたいな白さは別世界だ。見ると目にちくちく刺さるような尖った白さ。雪が降ったのかと思っただけ、雪じゃない。雪とおなじ純白だけど、雪みたいに積もっていない。

しかもその白さときたら、雪よりももっとずっと白くて、キラキラ輝いている。そして風が通った隙間はぜんぶ、針葉樹の細い葉のひと筋ひと筋までもとの形のままだに、真っ白々だ。

出がけにお掃除のおばさんに、外の景色を指して「すぐきれいな」と言ったら、うなずいて、

「ジーヴル！」と言った。

教室で、お掃除おばさんの声を思い出して辞書を見たら、

土に眠る (3)

「give 霧氷」と書いてあった。霧氷かあ。すぐそばに「ジヴレ」という動詞もあって「クリスマスツリーに白い粉をかける」と書いてあった。ユミのうちでもクリスマスツリーを作ったことがある。ママが真綿を薄くのぼして、枝にふんわりと乗せていた。クリスマスツリーに綿を乗せるのは雪のつもりだと思っていたけれど、ほんとは霧氷だったんだ！ 大発見だ。

夜のうちに気温が下がると、大気中の水分が凍って氷の微粒子になり、それが屋根や芝生、樹々の枝葉に薄い膜みたいにびっちりくつつく。で翌朝は、雪が降ったあとと似た景色になる。ちょっと見は雪の朝みたいだけど、よく見るとまったく厚みがない。もっと面白いのは、真向いから風を受けた側だけが白いこと。それってすごくふしぎ。だって反対側はもとのまま、ふつうの色をしているのだもの。教室に行く途中も、ユミは道のまんなか立ってしばらく白銀の世界に見とれ、それからくりりと後ろを向いて、

今度は色のある景色を見た。そしてまた白一色に向き直る。それからまた色のある世界。くりり！ で白い世界。くりり！ で色の世界。雪道でくるくる回る一人遊びに、ユミはいつまでも飽きなかった。

でも、授業が終わって外に出たら、もう霧氷は溶けてなくなっていた。ジヴレは朝のうちだけなのだ、残念。

ノエルから数日すぎた頃、商社マンの村山さんが、「おーい、いたよう、もう一人！」

と、大きな声で言いながらユミに近づいてきた。なんのことかと思ったら、このデイジョンにもう一人、日本人がいることが判明したのだそうだ。

「クリスマスに三ツ星レストランのトロワ・フザンに行ったらさあ、ギャルソンが、うちでコックの修業をしている日本人がいますよって、言うのよ。で、デザートになった

土に眠る (3)

ら、その人がテーブルまで出て来た」

それじゃあその人を呼んでパーティをしようということになって、お正月の二日、たった一組の夫婦者の山岡さんのアパルトマンに、みんなが手作りの日本料理を持ち寄って昼ごはんを食べた。

新しく発見された日本人たる夏目さんは、ひとわたり紹介がすんだ開口一番、

「ああ、こんなに日本人がいたのかあ」と、じつに感慨深げに言った。いままで日本人の誰とも知り合わずにひとり外国に暮らしてきた、その感じがしみじみ伝わる口ぶりだった。夏目さんはフランス料理を修業中のコックさんだ。学生と違って、町をうろついている暇がない。それで長らく日本人に出会うことがなかったのだそう。

夏目さんは日本人の数にも驚いたが、それと同じくらいテーブルに並べられた皿の中身のほうがもっと興味深かつ

たたようだ。形のゆがんだ厚焼き卵、分厚い牛肉とチコリの中華風炒めもの、若トリの白ワイン蒸しなどを、ひとつひとつ手に取って、「なるほど、なるほど」と言いながら、つくづくと眺めていたが、あまり手をつけなかった。彼が旺盛な食欲を見せたのは、ユミが作っていた梅干し入りのおにぎりだ、これは「うん、うまい！」と言いなながら、三つもたいらげた。日本から送ってもらった大切な梅干しを大盤振る舞いしたものだ。

マダム・サキヤマも日本ふうの煮物を一品たずさえて、顔を見せていた。

このマダム・サキヤマという人が、ユミはどうも苦手だ。もう何年も前からディジョンにいて、博士論文とかを準備しているという話だけれど、ぜんぜん話をしない。それだけなくて、ほとんど表情を動かさないので。ユミがディジョンに着いてまもなく、イヌ君といっしょに町を歩いて、マダム・サキヤマに出会ったのが最初だった。イヌ

土に眠る (3)

君がいちおうユミのことを紹介してくれた。マダム・サキヤマは、

「ああ……」

ほとんど声にならないような微かな声で言っただけで、一瞬じり。あとは何も言わなかった。ユミがもっと年上だったから、ずいぶん失礼な人ね、と思ったにちがいない。でもそのときは、きつとバカにしてるんだと思っただけで悲しかった。ちゃんとした留学生で、論文まで書くようなエライ人には、高校を卒業しただけでフランスに来たような女の子なんか、バカに見えるのだろう。

それでも、そのお正月パーティにマダク・サキヤマが持ってきた料理はともおもしろかった。高野豆腐とニンジンと鳥の煮物だったけど、日本を出てから食べたことがなかったの、本気で感激した。それで、以前からの偏見もさりと捨てて言ったのだ。「おいしい。やっぱり奥さんだから、お料理がじょうずですね」って。

ら、お料理がじょうずですね」って。だって、マダムというのだから、結婚しているんだろと思っただけのもの。そしたらマダム・サキヤマは、また何も言わずにじつとユミの眼を見て、こんどはかなり長い間そのままでいた。その眼が、ちよつとうるんでる。正直ちよつとぞつとした。ほんとに変な人。誉められたのだから、ふつうなら「ありがと」とか、「いいえ」とか言うところじゃない。それなのに、人の顔をじつと見るだけ。まるで幽霊か寝ぼけたみたいな顔をして。まったく、昼日中だっていうのに。

変な人なんだけど、でも他の人たちはマダム・サキヤマをとともだじにして見ているように見える。ときどき声をかけて、ひととき優しく接している。そんなふうにされても、マダム・サキヤマは、とりたてて心動かされたようにも見えないのだけだ。

ほんとに気持ちの悪い人。だいいちサキヤマって、どう

土に眠る (3)

いう字を書くのかしら。崎山、向山、先山、いろんな字をあてはめてみても、どれも合いそうなかんじじゃない。カタカナ以外のマダム・サキヤマなんて、ユミには想像もできない。というか、そんな人だ。

その会に、ミヤちゃんは来なかつた。商社マンの村山さんがユミに

「ミヤちゃんには声をかけないほうがいいと思うよ。彼女が来ると、半田さんが嫌がるから」と言ったのだ。

理由は、ミヤちゃんが黒人と付き合っているから。

狭い町だから、ミヤちゃんがアフリカ人と親しくしていることはすぐにみんなに知れてしまった。ミヤちゃんのほうでも、ぜんぜん隠す気はないらしくて、すこぶるおおっぴらだ。ま、それもとうぜんだけど。フランスでは、仲のいい二人が人目を気にすることなんて決してない。

ある日のこと、たまたま数人が寄つた場で、村山さんが、「ミヤちゃんが黒人の腕にぶらさがって歩いてるのを見

た！」

と大げさに騒いで、そのようすを事細かに語つた。少し話をオバーに、色をつけて話したんだと思う。すると、外交官の半田さんが、

「なに、それは事実か？ もし事実ならば国辱ものだ！」と言つたのだつた。半田さんはときどきそういう年寄りみたいな物の言い方をする。それにそのときはちよつとふざけていたのだと思う。外交官がそんなことを言うのはまづいんじゃないかと、その時ユミはふと思つただけけど、でもその時はそれがみんなに受けて、大笑いになつた。

そのあと、村山さんは、何かというとそのことで下品な冗談を言うようになった。それは耳障りで、とても不愉快だつた。ユミがミヤちゃんと仲良しだからではなく、物の言い方それ自体、ちよつと毒があつていやらしい気がした。でも、それを許して、おつきあいであつて笑っているうちに、みんなもミヤちゃんにつき合いつづらなくなつてしまつたのだ。

土に眠る (3)

ミヤちゃんが悪いわけじゃない。みんなのほうが、自分たちの陰口や悪い冗談で自分をしばってしまったのだと思うのだけ。

お正月のパーティの時だって、ミヤちゃんが来ても、べつだん半田さんは嫌な顔なんかしなかったはずだ。ただ村山さんが半田さんの軽口を悪用して、いじめをやっただけだとユミは思っている。こんな遠い国の、こんな小さな日本人社会にまで、仲間はずれのいじめがあった。

まだしもなかったのは、ミヤちゃん自身がそのいじめにぜんぜん傷つかなかったことだ。自分が仲間はずれにされていることさえ、気がついていなかったと思う。ミヤちゃんにはママドゥに夢中だった。だから、とても幸せだった。少なくとも、ユミにママドゥの話をするときには、幸せそうに見えた。

ユミも、ミヤちゃんがママドゥと歩いているのを見かけたことがある。お正月休暇が終わったばかりの頃だった。

ママドゥは白人の女の人と肩をならべて歩いていた。背が高く、すごい美人だと思った。気のせいかもしれない。その斜め後を、ミヤちゃんが大きな鞆を抱えるようにして歩いていったのだ。とある角まで来ると、ママドゥは女の人と、頬と頬を軽くふれあう挨拶をして別れ、そのあとミヤちゃんの背中を抱くようにして、ふたりは並んで歩いて行った。ミヤちゃんはまるで小犬が主人を見るよううれしそうに、ほんとにかわいらしいかんじだったけど、でも見ていてちよっぴり切なかつた。

年末年始の休暇の後、春が来るまでの日々は長かったけど、ユミはよくがんばった。自分で言うのもおかしいけど、でもほんとはがんばった。つらいだろう、つらくないわけないと覚悟していたのがよかったのかもしれない。

ちゃんと予習をして授業に出た。先生の話はあいかわら

土に眠る (3)

ずよく聞き取れなかったけど、それでもなぜだか向こうの言ってることが少しわかるようになった。くりかえし耳にする短いフレーズの数が増えていった。

気持ちがいりそうになると、部屋の片づけをして掃除をした。お掃除おばさんがいるし、しなくてもいいのだけれど、でも洗面台や鏡を目地まで磨くと気分がせいせいした。窓のガラスも外に身を乗り出してせつせと拭いた。するとその後は、雪景色がきらきら輝いて見える。そして気持ちも晴れやかに冴えかえった。

いつまでも冬が終わらないんじゃないかと思うこともあったけど、でもぜったいそんなはずはないとカレンダーにいろんな目印をつけ、授業がわかってもわからなくてもいっしょうけんめい予習をして、机や椅子やドアまで磨きあげた。ま、他にすることがなかったのだけだ。

ある日、先生の言ってることがとても鮮明にわかったよ
うな気がした。信じられなかったけど、でもやっぱりわか

ってる。まるで霧が晴れて、ものがくつきりと見えたように。感動だった。

でも、その次の日は、またわからなくなった。わからうと努力するのもいやだった。で数日落ち込んでいると、またふっとわかる日がある。前よりもっと楽にわかるじゃないの！うれしかったあ！

そのくりかえしだった。わかった。わからない。お、わかる。ああ、またわからない。それをくりかえしているうちに、気がついてみると、苦労なく、でもないけど、まあまあわかるようになってきているのだった。

ある日、授業の帰り道、ちよつと暑いような気がしてオーバーの前のボタンを開けた。いっしょに歩いていたハンガリーのマリに、

「暖かいね、何度くらい？」

と聞いた。マリは寒い温度に強い。ハンガリーの冬はフランスよりもずっと寒いらしくて、ユミみたいに、寒いよう、

土に眠る (3)

こんな寒さはじめてだあ、なんて言わない。ユミの問いに、マリは落ち着いて、

「マイナス5度」

と答えた。マイナス5度ねえ、ユミは感心して呟いた。聞いてみれば、どうてい暖かいなんて言える気温じゃない。たぶんユミのほうで寒さに近づいたのにちがいがなかった。あるいは寒さがついにユミの中に居すわったというか…。

三月の始め頃、ミヤちゃんは気分が悪くて数日寝ついた。風邪だろうと思ってお見舞いにいったのだけど、べつに喉が痛いようでも熱があるようでもない。どうしたの？ と聞くとミヤちゃんは、自分でも首をひねって、「よくわからない」と小さい声で言った。たいしたことではなさそうだったけど、こんなに心細そうなミヤちゃんを見たことがなかったので胸が痛んだ。お医者さんに行ったほうがいいのかな、とふたりで考えたけど、フランス人のお医者さんに

フランス語で説明することを思うと、そのほうがもっと大変なような気がした。

数日してまた、ミヤちゃんはユミの部屋にやってきた。「もう、いいの？」と聞くと、「うん、ううん」と、どっちかわからない返事をして、しばらく下をむいて黙っていた。それから、

「もしかしたら赤ちゃんができたのかもしれない」と言った。

ユミは思ってもみないことだったので、心底びっくりした。

「えーっ？ うそ！」

「わかんないけど…」

それからが大ごとだった。次の日ミヤちゃんは日本の家に電話をし、シヨックを受けたお母さんに叱られて大泣きした。そのまた次の日、もう一度こんどは日本から電話があった。それで「あたし、日本に帰ることにした」のだった。

土に眠る (3)

た。
帰るとなると、あとはあつけないほどほとんど事が進んだ。ミヤちゃんはいそいそと、ほとんどうれしそうに話していた。いいような顔で出発の準備をした。フランスに着いたばかりの頃の積極的なミヤちゃんに戻ったようだった。赤ちゃんはどうする気なのか、ママドゥとはちゃんと話をしたのか、そういうこともユミは気にはなっただけど、どう聞けずじまいだった。